

## 近松門左衛門と片鱗記

本号消息欄に天理大学教授祐田善雄教授からの問合せを掲載したが、同氏は七月頃から片鱗記・続片鱗記を調べておられて、門左衛門の父・杉森作左衛門は福井藩士であることを実証された。岩波書店の「日本古典文学大系月報二八」から祐田教授の文章の一部を引用して左に紹介する。

福井藩主の越前幸徳忠昌が正保二年に薨じて、長男光通が家督を継いだ時に、三男の兵部大輔吉品が吉江に分封されて一家を立てる事になった。まだ六歳の幼少であったから、養育係の御附人が十九名任命された。福井県郷土叢書第四集「続片鱗記」下巻にその人名を載せているが、その中に杉森作右衛門の名が見える。この事実は杉森家系譜の信義の注と合致するし、近松が生まれる以前のことだから、近松の父をさしていることは間違いない。作左衛門でなく作右衛門になつてゐるのは古文獻にありがちなことで同一人と考えてよいから、元禄六年の浪人近松が杉森作左衛門を名乗つたのは父の名を継いだことが知られるのである。

近松の父は、系譜にもある通り、由緒ある家柄の出身で、教養の高い有能の士であつた。そのために吉品の養育係という重要な役に選ばれたのであつて、同僚の顔触れを見てもそのことは肯ける。母は半井岡本為竹法眼の女である。為竹は忠昌の侍医で千石の知行を取つた教養の高い人物であつたから、母の人物は想像出来るだろう。近松が「代々甲冑の家生まれながら」と述懐するにふさわしい境遇であつて、彼の毛並みのよさを示している。